

■第115回 み言葉の分かち合い

●第1朗読 イザヤ書35・1~6、10

この箇所は、前章で語られた「神に逆らう民への裁き」に続く、希望の預言（回復と救い）です。荒れ野・荒れ地は「神の不在」によるイスラエルの荒廃を象徴しており、神の救いが訪れると、地は蘇^{よみがえ}り、悲しみの場所が「花で満ちて」喜びに変えられます。レバノン杉を象徴する力強さ・美しさ・豊かさは「レバノンの栄光」を現しており、「カルメル（山地）とシャロン（平野）」は肥沃^{ひよく}で豊かな土地として知られており、神が与える祝福の象徴です。神が実際に介入され民の救いを現すので「主の栄光と神の輝き」と言った後に、絶望や恐れに沈む民に対して「弱った手に力を込め、雄々しくあれ」との励ましは「主が来られるので勇気を出しなさい」とのことです。ここでの神の「救い」は、①バビロン捕囚・異国の支配からの解放。②罪からの救いで、これは後に、イエスにより成就されます。神の栄光を預言する言葉として「盲人の目が見え（マタイ9・27-30）聞こえない耳が聞こえた（マルコ7・31-37）」これらは、イエスの奇跡を通して実現します。待降節第3主日の祭服がピンク色なのは、悲しみから喜びを象徴しています。代価を払って奴隸状態から解放することを「贖^{あがな}う」と言い、罪を犯して捕囚となったイスラエルの民を再び神の民にします。バビロン捕囚からの帰還と神との交わりの回復が「シオン（エルサレム神殿）への帰還」と言い、永遠の命が与えられ、神の国への救いに至る「靈的な帰還」を象徴する言葉となっています。

●第2朗読 ヤコブの手紙5・7~10

ヤコブは手紙の前半では、信仰は行動に現れ、言葉と行動は一致すべきだと語ります。この箇所では、信仰生活における試練・忍耐・行動についての教えです。再臨によって神の正義は必ずや実現すると固く信じて、今の苦難や不正に動搖せずに信仰を保ち続け「主が来られる日まで忍耐」します。農夫が、忍耐を必要とするプロセスを「秋の雨（10月頃）と春の雨（3月頃）を待つ」に喩えており、信徒も試練は一時的なことであると知り、再臨を静かに待つことにより「尊い実り（救い・報い）」が得られます。信仰と希望を抱いて「積極的」に神の時を待つことが「忍耐」なので、揺らぐことのない「内に秘めた信仰」を保ち、見えずとも神の御手が働くことを確信し続けて、どんな苦難にも神の救いがあると信じ抜き、「心を固く保つ」ことです。「再臨が迫る」と信徒への試練は増すので、動搖せずに希望を保ち、互いに励まし合い、不平や争いは避けります。「不平を言わぬこと」が裁かれない理由の最初にあるのは、神への不満と信仰の未熟さを表しており、言葉は人生を造り、（ヨハネ1・1-4）これに影響を及ぼすからです。神が家の境界である「戸口に立つ」ので、即座に正義を実施される状態にあります。旧約における預言者（エリヤ、アモス、イザヤなど）たちも、迫害の中にあっても使命のためには耐え忍び、信徒の模範となり「主の名による預言者たち」なのです。信徒は彼らに倣い、神の約束に希望を抱き続け、愛の実践をします。

●福音書朗読 マタイ11・2~11

弟子たちはガリラヤの各地で宣教活動を行っている一方、洗礼者ヨハネは、ヘロデ大王の不義を指摘して投獄され、弟子たちよりイエスの評判を聞き、この箇所になります。ヨハネがイエスに洗礼を授ける際は、世の罪を取り除く神の小羊（ヨハネ1・29）と部分的には知っていましたが、メシアの全体像（苦難・十字架）までは理解しておらず、弟子をイエスの所に行かせ「真のメシア」なのか確認させます。当時、圧制から解放させるのがメシアとの考えが強くあり、柔軟で罪人に寄り添うイエスの姿に疑問を抱いたからです。イエスは「わたしがメシアだ」と言わず、わたしの言動で預言（盲人が見えるなど、イザヤ書35・5-6、61・1）が実現しており、「見聞きしたこと伝えよ」と告げます。イエスの姿と民衆が期待する姿とのギャップに失望せず、彼を受け入れる者こそ「つまずかない人は幸い」だと言っています。ヨハネは「風にそよぐ葦」「世俗的な服を着る人」ではなく、①メシアの到来を告げ、悔い改めに導きます。（イザヤ40・3）②旧約から新約への橋渡し役を担い、預言を成就させた旧約最後の預言者です。③イエスは彼を「預言者以上の者」と特別に称えます。新約時代、イエスの十字架の死と復活を信じて「聖霊」に導かれた信者たちを、イエスは「天の国で最も小さい者」と語り、この人たちの恵みの大きさや深さは「彼よりも偉大」だと言われ、静かな「喜び」（フィリピ4・4）が訪れます。

著者 蒲池 明憲